

## 森立之の生涯 4

森立之(1807～1885)

多紀家の人々

### ●多紀家の開祖・丹波康頼

江戸時代後期に江戸の漢方医療をリードした多紀家の祖先は、<sup>たんばやすよ</sup>丹波康頼(912～995)という人物だった。

康頼は中国から来日した帰化人の子孫で、1800年前、中国の後漢の終焉ちかくの靈帝から五代目の子孫に阿智王という人がおり、この阿智王が応神天皇のとき、日本に渡ってきたという(5世紀)。その子孫が丹波地方に住むようになり、坂上姓を賜った。康頼はその子孫で、丹波国の出身。

医療・医学に精通し、京に召されて丹波宿禰の姓を賜り、針博士、医博士、左衛門佐、左兵衛医師、丹波介、従五位上と進んだ。

天元5年(982)『医心方』全三十巻を編集し、円融上皇に献上した(永観2年、984年)。この功績により、丹波家は宮廷医もしくは医師の名家として以後1000年続くことになった。

### ○丹波康頼の以前の日本の医師

和氣清麻呂の子、和氣広世：医学に長け、日本の宮廷医、和氣家、<sup>なからい</sup>半井家の始祖となった。

出雲広貞、安倍真直：『大同類聚方』を編纂

菅原岑嗣：『金蘭方』

いずれも伝記といえるほどの資料はなく、著書も残っていない。

和氣と丹波の二家を和丹の二家といい、宮廷の医療を担当した。

### ●江戸医学館

丹波康頼の末裔である多紀元孝(たきもとたか)が、私塾・※躋壽館(せいじゅかん)を1765年に建てたが、これを起源として、のちに幕府直営となる江戸医学館が開設された。土地は神田佐久間町の幕府天文台跡地を借領した。

幕末も押し迫ったのちに、松本良順がオランダ医学を礎にした医学研修所を建てたが、これは江戸医学所と称した。下総の国・佐倉にあり、のちの順天堂大学の前身である。

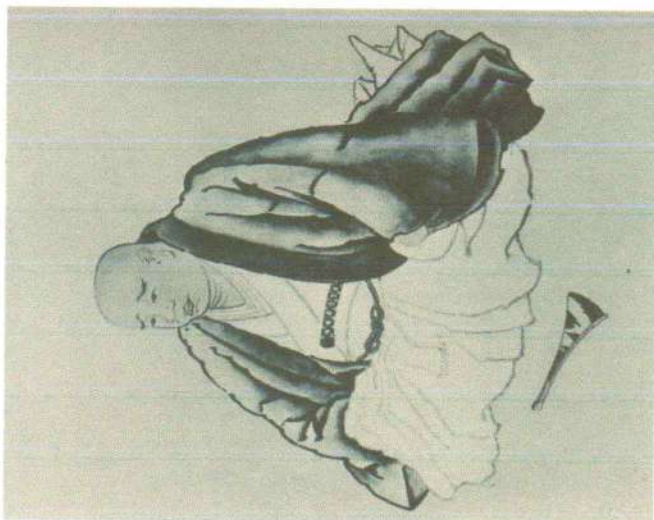
躰壽館は、1791年に幕府直轄の江戸医学館となった。教授内容は「素問」「靈樞」「難経」の鍼灸医学、「傷寒論」「金匱要略」「本草経」の湯液(漢方薬)の六部書であった。

多紀家は向柳原(現・浅草橋)に所在した。

医学館創設にあたっては、幕府薬典頭(やくてんのかみ)の半井家、今大路家から妨害があった。

※ 躰壽館の名の由来 北宋の太宗の世に、太平聖恵方百巻が撰せられた。その太宗の叙文「朕、億兆の上に尊居し、常に百姓をもつて心と爲す。五氣の或いは乖くを念い、一物の所を失い生理を盡さざるを恐れ、朕、甚だこれを憫れむ。所以に親しく方書を閲し撰集せしめ、溥天の下、各のおの遐年を保ち、我が生民と共に壽域(秦平の世)に躰(のぼらしめんとす。今編勒して一百巻と成し、命じて太平聖恵方と曰う。俛つて彫刻印版せしめ、徧く華弟に施す。凡爾の生靈、宜しく朕が意を知るべし」

● たきもとやす  
多紀元簡



著書に「素問識」「靈樞識」があり、素・靈研究の上では画期的な注釈書であった。そうした意味で、森立之の「素問放注」が現れる布石となった。

● 多紀<sup>さいてい</sup>菫庭(1795〜) 元簡の五男 菫はヨロイグサ、セリ科の多年草。白芷<sup>びやくし</sup>。

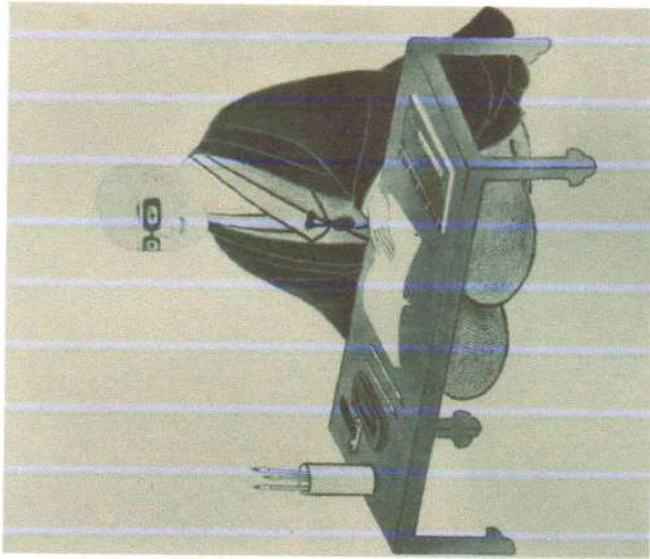
・早熟の人で、15歳のとき、朝鮮の医学書に引用された佚文<sup>いつぶん</sup>を抽出して古い医学文献の復元を行なっている。

二十歳時、分家を立てる・・・矢の倉多紀家(現在の浜町)

1830年代以降は、父元簡の注釈書の補遺を行なって刊行した・・・「素問紹識」「靈樞紹識」

仁和寺本太素や宋版外台秘要方<sup>げだいはひようほう</sup>をもとに、元テキストを復元する考証学的方法を確立した。

寛政期に直轄化された医学館に、幕府以外の医師・町医者<sup>まちいしや</sup>の出席をみとめた。これ以降、抽齋、立之といった人材が集まった。



● 江戸医学館と抽齋・立之

弘化元年(1844) 三月、抽齋(40)、躰壽館講師を命ぜらる。

弘化四年(1847)

五百談、お父さん(抽齋 43)は、其の頃、養竹さん(立之 41)の事に就いて、福山藩の服部九十郎さん(公用人)を始め、小此木さん(名八伴七、勘定奉

行、大田さん、宇川さん(二人共に勘定奉行)、伊澤兄弟(榛軒、柏軒)、それから小島先生(成齋なり、父と八兄弟よりも親し)、など種々幹旋を頼りだけども、肝腎の殿様(伊勢守正弘)が睨んでお出でになるので、意の如くに行かなんた。テ先づ多紀樂真院(芭庭)さんの心を和らげて、醫學館の何かに使つて貰ひ、それを規模に帰参を迫るより外に仕方がないといはれた。

澁江保「森積園伝」

生の母が弘化元年甲辰十一月六日に澁江へ嫁してより、約二三年間へ、枳園へ猶大磯に居て、折々江戸に出て、出る毎に、一週間位づつ澁江の家に逗留して居たらしかつた。母の話に『養竹さんが大磯に居た頃、少し懐が暖かになると、メカシ込で、江戸へ遊びに出て来た。御召縮緬のきものを着て、海老鞆の脇指を指して、一寸棲<sup>つま</sup>を取つて、剥身絞りの禪<sup>びきみ</sup>などを出し掛けて、ひとりで意氣がつて居た。何処迄も七代目張りで阿つた。「イヨ成田屋ア」と声を掛けると、一寸立つて力んで妙な声を出した。

同 右

■ 嘉永元年(1848) 五月福山藩の赦免により、躰壽館にもどる。

幕府よりの千金方校刻手伝いの内命が、帰参に大きく働いた。

○ 浪人生活の足を洗つて小嶋寶業の本を訪れた時、寶業が古書を出して立之に鑑定させたところ、その鑑定眼は少しも衰えていなかった。

森鷗外「伊澤蘭軒」

○ 「我を知る者は寶業、我を愛する者は榛軒※」(枳園随筆)

※天保九年立之、浦賀にて祖母を喪う。立之は時々、伊澤氏、澁江氏をたよ

つて江戸に来ていた。祖母亡きあと、立之は遺骨を葬るため、奉じて江戸に来て榛軒にその由を告げた。榛軒は幾許かを貽つて葬儀の資となしたが、立之は他に用立ててしまい、また遺骨を奉じて浦賀に帰った。このことが両三度に及んだので、榛軒は自ら金を懐にして立之とともに目白の洞雲寺に行き、遺骨を寺に葬らしめた。立之の祖父・伏牛親徳の墓も、当寺にある。 森鷗外「伊澤蘭軒」

嘉永元年(1848)10月 躰壽館事業として千金方校刻手伝いの内命を得る。

此の時、澁江の家へ神田御玉ヶ池に在り、枳園をば近所に世帯を持たせて、家賃は勿論、日用品を悉く澁江から贈つた。それでも猶細君が殆ど毎日、請求に来たり、果てへ上等下等の衣類迄も供給した。母の語る、『勝兵衛…枳園の細君なり、名はおかつ、…は、森が實家から(五百が)沢山持つて來たのを知つて居たが、もう此の時分に大分なくなつたのを知らないで、頭の天辺から、足の爪先まで悉く請求する。禪ばかりでも白縮緬のを五六本やつたとの事である。』父の尽力でヤツト多紀の心を和らげる事が出来、嘉永元年戊申十月十六日、枳園へ醫學館の醫書彫刻取扱手傳を命ぜられた。

澁江保「森枳園伝」

## ○ 医心方縁起

### ■ 仁和寺本医心方を伊澤蘭軒が影寫

文政三年(1820) 医心方の影寫おわり(文化十四年・1817に開始、蘭軒、跋を附す。

「右丹波康頼医心方廿本。これを多紀氏事脩堂(いつしゅうどう)に借る。友人嶋武(高

嶋信章か余の為に影鈔す。その旁訓朱點の如き、乃ち余手ずから鈔寫す。青筆を以てするは桂山先生(多紀元簡)の標記なり。朱筆を以て旁を抹す(注記する)ものは、余自ら人名と書目とを搜閱するに便ならしむるなり」

仁和寺本は残脱の書であつて(全三十巻のうち五巻しか残つていなかった...小曾戸洋)、半井本に比すべきではなかったが、当時の学者はこれだに容易に窺うことを得なかつたのである。

森鷗外「伊澤蘭軒」

安政の医心方...医学館事業Ⅱ半井本

蘭軒医心方Ⅱ多紀氏本Ⅱ仁和寺本...寛政三年(1792)躰壽館が官設となつたとき、仁和寺本を影鈔した。

#### ■安政元年の幕府校刻事業...森鷗外「澀江抽齋」より (その四十四)

醫心方は禁厥の秘本であつた。それを正親町天皇が出して典藥頭半井通仙院瑞策に賜はつた。それから世半井氏が護持してゐた。徳川幕府では、寛政の初に、仁和寺文庫本を謄寫せしめて、これを躰壽館に藏せしめたが、此本は脱簡が極て多かつた。そこで半井氏の本を獲ようとして屢命を傳へたらしい。然るに當時半井大和守成美は獻することを肯んぜず、其子修理大夫清雅もまた獻せず、遂に清雅の子出雲守廣明に至つた。

半井氏が初め何の辭を以て命を拒んだかは、これを詳らかにすることが出来ない。しかし後には天明八年の火事に、京都に於いて焼失したと云つた。天明八年の火事とは、正月晦日に洛東團栗辻から起つて、全都を灰燼に化せしめたものを謂ふのである。幕府はこの筈に満足せず、似寄りの品でも好いから出せと誅求した。恐らくは情を知つて強要したのであらう。

半井廣明は已むことを得ず、かう云ふ口上を以て醫心方を出した。外題は同じであるが、筆者區々になつてゐて、誤脱多く、甚だ疑はしき贗卷である。とても御用には立つまいが、所望に任せて内覽に供すると云ふのである。書籍は廣明の手から六郷筑前守政殷の手<sup>まきただ</sup>にわたつて、政殷はこれを老中阿部伊勢守正弘の役宅に持つて往つた。正弘は公用人渡邊三太平を以てこれを幕府に呈した。十月十三日の事である。

越えて十月十五日に、<sup>たねのり</sup>醫心方は若年寄遠藤但馬守胤統を以て躰壽館に交付せられた。此書が御用に立つものならば、書寫彫刻を命ぜらるであらう。若し彫刻を命ぜらることになつたら、費用は金藏から渡されるであらう。書籍は篤と取調べ、且刻本賣下代金を以て費用を返納すべき積年賦をも取調べるやうにと云ふことであつた。

半井廣明の呈した本は三十卷三十一冊で、<sup>けんの</sup>卷二十五に上下がある。細に検するに期待に負かぬ善本であつた。<sup>もと</sup>素醫心方は<sup>ちうげんぼう</sup>巢元方の<sup>びようげんこうろん</sup>病源候論を経とし、隋唐の方書百餘家を緯として作つたもので、その引用する所にして、支那に於いて<sup>いっぽう</sup>佚亡したものが少なく無い。躰壽館の人々が驚き喜んだのもことわりである。

幕府は館員の進言に従つて、直ちに校刻を命じた。そしてこれと同時に、總裁二人、校正十三人、監理四人、寫生十六人が任命せられた。總裁は多紀樂眞院法印、<sup>ほふげん</sup>多紀安良法眼である。樂眞院は<sup>まきうこ</sup>菫庭、安良は<sup>まきうこ</sup>曉湖で並に二百俵の奥醫師であるが、彼は法印、此は法眼になつてゐて、當時矢の倉の分家二菫庭が向柳原の宗家の右に居つたのである。校正十三人の中には伊澤柏軒、森沢園、堀川舟庵と抽齋とが加はつてゐた。

江戸時代の日本に<sup>こせうとく</sup>顧從徳本「素問」という、明代に刊行された稀購本何冊があつたことが澁江抽齋・森立之『經籍訪古志』に著録されている。澁江抽齋の所蔵というものもここに記されていたが、「澁江氏の顧本は、久志本氏これを滅して和刻本と成す」とあり、覆刻して和刻本を刊行したことが分る。これに、森立之は「實に惜しむべし」という一言を添えている。

この久志本氏とは、医師として徳川家康とともに関東にやつて来た、もと伊勢神宮の神官である。新参の多紀家に仕える抽齋の所蔵する顧從徳本素問を、わざわざ覆刻せしめたという一件で、立之の無念が偲ばれる。